

山口県立萩美術館・浦上記念館

H A G I

HAGI URAGAMI MUSEUM MAGAZINE

萩

113

AUTUMN ISSUE
2024



水野年方
三十一
萩
明治三十二年

陶芸館案内

陶芸館は、400年の歴史を有し、本県の文化資源である萩焼をはじめとする陶芸の振興を目的に、平成22年(2010)に開館しました。1階(展示室7)と2階(展示室8)に展示室を設けており、今年度は本館の設備改修工事(令和7年3月末まで※予定)のため陶芸館でコレクション展を行っており、現在は浮世絵、東洋陶磁、陶芸の作品を展示しています。

ここでは令和6年度の展示の中心となる陶芸館の案内とともに、展示内容について紹介します。

陶芸館展示エリアのご案内



萩焼を知る



萩焼紹介スペース

1階ロビーでは萩焼の歴史や素材、江戸時代に開窯した古い窯から出土した陶片資料を展示しています。また、萩焼の制作方法などを紹介する映像も用意し、郷土のやきものについて知識を深める場を設けています。

作品と自然の共演



齋藤敏寿 (archetype79911) (1997)と陶芸館、藍場川



秋山陽 (Heterophony 3) (2009)と青葉紅葉

本館と陶芸館の間には藍場川が流れ、周辺を彩る四季折々の植物は陶芸館を情緒的に彩り、自然と作品との共演を楽しむこともできます。

令和6年度のコレクション展

今年度の陶芸館では、当館コレクションをいつもと違った雰囲気で見学しています。陶芸館の高い天井と広々とした空間で展示する浮世絵、また、通常は別々に展示される東洋陶磁、陶芸、工芸を共通のテーマでセレクトし、一緒に展示しています。

陶芸館での浮世絵、東洋陶磁展示は、右記の内容で令和7年4月13日まで開催しています。

ぜひ、この機会に当館コレクションの新しい魅力に触れてみてください。

- 12月22日まで
東洋陶磁・陶芸展示
「龍一伝説への道」
東洋陶磁展示
「浦上コレクション 東洋陶磁の美」
→4~5ページで詳しく紹介
- 令和7年4月13日まで
浮世絵展示「美人画の四季」
→2~4ページで詳しく紹介
- 令和7年1月2日~4月13日
東洋陶磁・陶芸・工芸展示
「萩美百華」
東洋陶磁・陶芸展示「茶陶萩」



浮世絵展示「美人画の四季」の会場風景

美人画の四季

近代版画に描かれた女性を紹介

【会期】7月9日(火) — 2025年4月13日(日)

第4期 9月25日(水)～10月27日(日)

第5期 10月29日(火)～11月24日(日)

第6期 11月26日(火)～12月22日(日)

明治期の浮世絵師たちのなかには、日本画家としても活躍した絵師がいます。彼らが手掛けた浮世絵版画の美人画は、伝統的な木版技術によって制作されながらも、人物描写や色彩においては日本画を想い起こさせ、近代的で清新な感覚を含んでいます。

本展では、明治中期以降の近代版画による美人画を、季節に合わせて紹介します。明治期に浮世絵師として活

躍した水野年方^{みずの としかた}の「今様美人」シリーズや、右田年英^{みぎ たとしひで}の「美人十二姿」シリーズを中心に、大正・昭和期に活躍した伊東深水など、さまざまな絵師の作品でお楽しみいただきます。

※会期中に展示替えがあります。全9期に分けて3作品ずつ展示します。
※本館の設備改修工事に伴い、会場は陶芸館となります。

おすすめの一品(その1)



「美人十二姿」は、一年間の各月ならではの風俗を楽しむ江戸時代の女性を描いたシリーズです。明治半ばともなると、江戸時代はひと昔前。この頃には江戸回顧の風潮が高まり、さまざまな絵師たちが時代考証を行いながら、江戸時代の女性をテーマに美人画を手掛けていきます。

本作で描かれているのは、霜月(十一月)の女性。着物の肩のあたりをよく見ると、「寅」「卯」「辰」「巳」と干支の文字が大胆にあしらわれています。江戸時代前期に初版された小袖のデザイン見本集『新撰御ひいながた』^{あさいりょうい}(浅井了意著、寛文7年[1667])には、同様の図柄が収録されています。

ところで、この女性が真剣に読んでいるのは、暦の一種である伊勢暦^{いせごよみ}。伊勢神宮の御師^{おし}やその手代が、日本各地の檀那^{だんな}回りを行う際に土産として配ったものです。伊勢暦には多数の項目が設けられていましたが、その中には納音^{なっちん}(干支を五行に分類し運勢を判断するもの)や、正月から十二月までの日ごとの吉凶も記されていました。女性が読んでいるのは、そのような占い記事なのかもしれません。そろそろ来年のことを意識しはじめる…そんな十一月の気分が漂う作品です。

浮世絵師 右田年英(1863-1925)は、現在の大部分に生まれ、上京して洋画を学んだ後、明治17年(1884)から浮世絵師 月岡芳年^{つきおかよしとし}の門人となりました。大正期まで活躍し、錦絵のほか新聞小説の挿絵や日本画を手掛けました。

第5期 10月29日(火)～11月24日(日)

右田年英「美人十二姿 霜月」
大判錦絵、明治34年(1901)



おすすめの一品(その2)



前ページで紹介した「美人十二姿」と同じく、「今様美人」も各月の女性の姿を描いたシリーズですが、大きく異なるのは同時代の明治の女性であるということです。本シリーズには目録が備わっており、本作の一月には「御祝儀」というタイトルがつけられています。床柱の飾りも、紅白の色づかいが正月らしく目を引きます。また、室内は畳の上に絨毯が敷かれ、庶民の生活の中で日本文化と西洋文化が取り混ぜられてゆく様子うかがえます。

女性の着物や絨毯のフリンジ部分には、空摺りと呼ばれる摺技法によって和紙に凹凸が生まれ、ふっくらとした質感が表現されています。

浮世絵師 水野年方(1866-1908)は、明治中期から後期にかけて活躍しました。月岡芳年の門人であり、年方の門弟には鑄木清方かぶらき きよかたがいます。浮世絵師として錦絵や木版口絵を手掛けただけでなく、日本画の制作も積極的に行いました。



第6期 11月26日(火)～12月22日(日)

水野年方「今様美人 一」
横大判錦絵、明治31年(1898)

収蔵品 紹介

美人画でみる七五三

今号表紙の作品は、現代でいう七五三の光景を描いたものですが、美人画にはこのテーマを扱った作品がしばしば見られます。

子供たちが幼児から児童になるための通過儀礼である七五三。この呼称が定着したのは、1960年代のことだそうで、それまでは“髪置”かみおき、“袴着”はかまぎ、“帯解”おびときと呼ばれて親しまれていました。晴れ着の子供を連れて産土の神社に参詣し、わが子の成長を氏神様にお祈りするとともに、3歳の幼児が頭髮を伸ばし始めること(髪置)、5歳の男児がはじめて袴をはくこと(袴着)、7歳の女児が子供の着物についている付紐を取って帯を使い始めること(帯解)を祝いました。

たとえば、右の作品は、宮詣当日の朝の一コマといったところでしょうか。裸で元気に動きまわる子供と、晴れ着を着せようとする女性の姿。右奥に描かれているのは炬燵こたつで、着物をのせて温めているようです。床には紅白の水引きがかかった祝いの品が置かれています。



歌川豊国「十二枚続 霜月 いわるの図」
大判錦絵、文化(1804～1818)末期

こちらの2作品は、ともに男児が袴をはいて一人前の格好をしています(右の作品には、帯解の女兒もいます)。それぞれの画面には注連縄や鳥居しめなわが描かれています。いよいよ神社へお参りです。

このように見ていくと、七五三(髪置・袴着・帯解)は、さまざまなシチュエーションで描かれてきたことが分かります。子供たちのための大切な年中行事として、人々に親しまれてきたからこそと言えるのではないのでしょうか。

(当館学芸課主任 瀧田恵子)



鳥居清長「風俗東之錦 袴着」
大判錦絵、天明3~4年(1783~1784)頃



尾形月耕「婦人風俗尽 いわい」
大判錦絵、明治24年(1891)
※「美人画の四季」で展示
[◎10月29日(火)~11月24日(日)]

展示室8 (陶芸館2F)

浦上コレクション 東洋陶磁の美

【会期】7月9日(火) — 12月22日(日)

当館所蔵の東洋陶磁コレクションは、その大部分が萩市出身の実業家で美術コレクターであった浦上敏朗氏(1926~2020)によって作り上げられたものです。中国・朝鮮の古陶磁を核にしたこのコレクションは、現代絵画や浮世絵の鑑賞で鍛えられた浦上氏の審美眼を通して蒐集され、どれも魅力ある美しさを放つ作品が選びだされており、近代以降に古陶磁を純粋な美術鑑賞の対象として捉えた「鑑賞陶磁」の性格を持つコレクションといえます。

本展では、新石器時代の土器から明時代の法花にいたる中国陶磁と、高麗時代の翡色青磁から朝鮮時代の青花磁器にいたる朝鮮陶磁の中から、浦上コレクションの東洋陶磁の精華ともいべき優品を厳選し紹介します。



青花鳳凰文瓶 中国・景德鎮窯
元時代 14世紀 当館蔵(浦上敏朗氏寄贈)

おすすめの一品

唐三彩とは唐時代(618~907)の特に7世紀後半から8世紀前半に作られたやきものです。主に白色、緑色、褐色(黄色)の三色で彩色されています。本作のように藍色を用いたものは藍三彩と呼ばれます。「明器」と呼ばれる、唐時代に貴族の墓に死者とともに埋葬された副葬品として作られました。現在までに河南省、河北省、陝西省などが産地とされています。

平たい器である盤は、唐三彩の中でも多く発見されている器種です。内面には篋で宝相華(仏教美術などにもみられる架空の花。縁起の良い文様)を深く彫り込み、その上から着色されています。文様は丁寧かつ精細に着色されており、当時、完成度の高い唐三彩が安定して生産されていたことが分かります。



藍三彩宝相華文三足盤
中国 唐時代 8世紀 当館蔵(浦上敏朗氏寄贈)

龍 — 伝説への道

中国磁器に表された龍のカタチ

【会期】7月9日(火) — 12月22日(日)

頭はラクダ、角はシカ、目はウサギ(または鬼)、耳はウシ、項はへび、腹は蜃(蜃気楼を起こすとされる大蛇)、鱗はコイ、爪はタカ、掌はトラ——中国・宋時代の辞書『爾雅翼』は、龍の特徴をこのように記し、これを「九似」と称しています。もちろん、現実の動物として龍は存在しません。しかし、中国では古くから龍は水と関係が深く、雲をおこし、雨を降らせ、そして神聖な世界である天に昇る靈獣として視覚化され、尊崇してきた歴史があります。また、龍は東西南北を護る四神のひとつとして星座に割り当てられ、天帝の乗り物や使者としても位置付けられました。やがて龍は天帝を祀るのが使命とされる歴代王朝の皇帝のシンボルとなり、宮殿の建築や服飾、様々な器物の中に表現されてきました。

今回の展示では、こうした龍をモチーフにした中国・朝鮮半島のやきもののほか、龍のモチーフを自己の人生と重ね合わせて壮大なスケールの作品に仕上げた陶芸作家・三輪龍氣生(1940～)の「龍人伝説」シリーズも併せて紹介します。東洋の造形世界に深く根付いた多彩な龍の表現をお楽しみください。

おすすめの一品(その1)

「五彩龍文壺」は中国・明時代に景德鎮窯で焼かれた磁器で、高台内には万暦年間(1573～1620)の焼造であることを示す「大明萬暦年製」の銘があります。胴が膨らみラップのように口が開いた形は「尊」と呼ぶ中国の古銅器を模したもので、表面には雲の間を悠々と飛ぶ赤龍と青龍、雷文、芭蕉の葉を意匠化した蕉葉文などが五彩と呼ばれる鮮やかな色絵で表されています。ところで、よく見ると2頭の龍の爪はいずれも5本に表されています。中国の龍は爪が3・4・5本ものがありますが、中でも5本(五爪)の龍は皇帝の象徴とされ、一般の人々の使用は厳しく禁じられていました。つまりこの龍は、皇帝のいる宮中で使用するためのやきものであることを物語っているのです。



五彩龍文壺 中国・景德鎮窯
明時代・万暦在銘(1573～1620)
当館蔵(浦上敏郎氏寄贈)

おすすめの一品(その2)

「青花龍文甕」も明時代の景德鎮窯で焼かれた磁器で、側面には二頭の大きな龍が青花(染付)で表されています。下には波が描かれ、龍は如意宝珠を追いかけて海上を飛んでいるように見えます。ただ、体には蝙蝠のような翼が生え、四肢は爪がなく魚のヒレのように表されているのが特徴的です。一般に、中国の龍は翼がなくても飛べるといったイメージがありますが、実は様々な種類があり、これは「応龍」という種類に該当します。中国古代の地理書『山海経』によれば、応龍は伝説上の皇帝である黄帝と、神である蚩尤が争った際に黄帝が遣わした靈獣で、蚩尤を倒すためにまず水を蓄えたとされています。翼のある龍—応龍は水を蓄える甕のような器にはぴったりの図柄といえるでしょう。



青花龍文甕 中国・景德鎮窯
明時代・嘉靖在銘(1522～1566)
当館蔵

萩赤楽茶碗 (江戸時代中期)

山口県立萩美術館・浦上記念館では、浮世絵と東洋陶磁を中心に、近・現代の陶芸作品、金工や赤間硯、漆芸などの工芸作品を収蔵しており、また、地元の文化資源である萩焼も江戸時代のものから現代作家のものまで収蔵し、当館の特色のひとつとなっています。今年度の季刊「萩」ではその萩焼の魅力に触れていただきたく、名品をピックアップして紹介しています。その二回目となる今回は、「萩赤楽茶碗」(写真1)を紹介いたします。

楽茶碗とは、桃山時代より続く楽家の初代長次郎(?～1589)が、千利休(1522～1591)の侘茶の創意をくみ取り創作したと伝えられているものです。赤色を呈した「赤楽茶碗」、黒色を呈した「黒楽茶碗」がよく知られており、その後も代々、楽家で制作されています。

楽茶碗の軸となる侘茶の精神は、日常から見出された美しさを尊重するものであり、簡素なつくりの草庵を築き、華やかな装飾や造形を削ぎ落した茶碗や水指といった道具をそろえた静寂な空間のなかで、人々の心の交流を中心としようとしたものでした。桃山時代以前は大陸渡来の贅沢な器を用意した華やかな茶席でしたが、質素な趣のなかでおこなわれた侘茶の成立とともに生まれたものが楽茶碗だったのです。その掌中に素直におさまるような質素なかたちが、わびの独創的世界観を茶席にもたらしめました。その後、江戸時代前期に成立した表千家・裏千家・武者小路千家の三千家により侘茶は継承され、それとともに楽茶碗も広まっていきました。このような動きは萩焼にも影響を与えたようです。

「萩赤楽茶碗」はその造形や色合いから、楽家が制作した赤楽茶碗の影響を受けたことを感じさせます。萩

焼は、本来、轆轤という回転する道具をつかって全体のかたちを成形する特徴があり、そのため口縁部から高台まで端正に仕上がります。一方、楽茶碗はどのようにつくられたかと言うと、萩焼と異なり、手捏ねと篋削りという技法をつかって成形される点の特徴であり、そのため整ったかたちでありながら、少しずつ丁寧に捏ねた際の指の痕が微妙な凹凸となって器面に表れます。本作品も、口縁部に手捏ねによる痕が表れており、楽茶碗の制作技法を受け継いでいることがわかります。しかし、よく観察すると、楽茶碗との相違点も見られます。本作品の赤色は、釉薬の色が強く表れたものと考えられますが、原初的な楽焼の赤色は土の色が強く表れていると言われています。また、本作品の器面には口縁下部から腰部にかけて縦長に面取りされたような痕が一部に見られ、萩赤楽茶碗の個性ととらえられる点もあります。

本作品の作者は長州藩の御用窯をつとめた三輪家初代休雪(1630～1705)と言われ、晩年に藩命を受けて楽焼稽古のため京へ上ったことが伝えられています。それは楽家初代長次郎の頃から100年ほど後世の出来事で、楽家では五代宗入(1664～1716)の代にあたります。宗入は、長次郎が制作した華やかな装飾や造形を削ぎ落した碗を指向しながらも、独自の解釈を加えた制作をおこなったと言われていました。本作品が宗入の影響を受けたものか、長次郎の茶碗を指向したものかを知るにはもう少し手がかりが必要ですが、当時、初代休雪に楽焼稽古を命じた長州藩には、簡素静寂を重んじた侘茶の真髓に触れたいという思いがあったことが本作品からうかがえます。

(当館学芸員 市来真澄)



1. 萩赤楽茶碗 初代三輪休雪作 江戸時代中期・1703年(元禄16年) 当館蔵



2. 萩赤楽茶碗の高台

SCHEDULE 令和6年度(10月~12月)

■ 休館日 ★ イベント ◆ ギャラリートーク

10

OCT

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	★	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木
展示室1~6	設備改修工事のため、本館休館 (~2025/3/31)																														
特選鑑賞室	設備改修工事のため、本館休館 (~2025/3/31)																														
茶室																															
展示室7	東洋陶磁・陶芸 龍一伝説への道 (~12/22)																														
展示室8	東洋陶磁 浦上コレクション 東洋陶磁の美 (~12/22)																														
	浮世絵 美人画の四季 (④9/25~10/27) ※1																														

11

NOV

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	★	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
展示室1~6	設備改修工事のため、本館休館 (~2025/3/31)																														
特選鑑賞室	設備改修工事のため、本館休館 (~2025/3/31)																														
茶室																															
展示室7	東洋陶磁・陶芸 龍一伝説への道 (~12/22)																														
展示室8	東洋陶磁 浦上コレクション 東洋陶磁の美 (~12/22)																														
	浮世絵 美人画の四季 (⑤10/29~11/24) ※2																														

12

DEC

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火
展示室1~6	設備改修工事のため、本館休館 (~2025/3/31)																														
特選鑑賞室	設備改修工事のため、本館休館 (~2025/3/31)																														
茶室																															
展示室7	東洋陶磁・陶芸 龍一伝説への道 (7/9~12/22)																														
展示室8	東洋陶磁 浦上コレクション 東洋陶磁の美 (7/9~12/22)																														
	浮世絵 美人画の四季 (⑥11/26~12/22)																														

※1 美人画の四季(⑤10/29~11/24) ※2 美人画の四季(⑥11/26~12/22)
 ※ 令和6年度は茶室でのインсталレーション展示はございません。
 ※ 本館休館中(令和6年7月~令和7年3月)は特選鑑賞室での展示はございません。



イベント

開館記念日

【日時】10月14日[月・祝] 9:00~16:30
 【内容】ミニワークショップ、浮世絵スタンプ体験(申込不要)

教育・文化週間

【日時】11月1日[金]~7日[木]
 【内容】観覧無料

子ども子育てにやさしい休み方改革月間

【日時】11月8日[金]~30日[土]
 【内容】子ども連れの方は観覧無料

名品からの挑戦状!浮世絵まがいさがし

【日時】11月1日[金]~10日[日]
 【内容】まがいさがしに参加、正解された方に美術館オリジナルグッズをプレゼント

ミュージアムフオトスポット

【日時】11月1日[金]~10日[日]
 【内容】葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」のフオトスポットが登場

着物deフオト

【日時】11月1日[金]~10日[日]
 【内容】着物で来館された方に撮影&フオトプレゼント

ミュージアムコンサート

【日時】11月17日[日]
 【内容】展示室内での演奏(申込不要)
 【出演】王丹(二胡) 大橋 希(ピアノ)

ヘアでご鑑賞記念プレゼント

【日時】11月22日[金]
 【内容】パートナーとヘアで来館された方に記念品をプレゼント(なくなり次第終了)



ギャラリー・トーク

(担当学芸員による展示作品解説)

- ◆ 10月12日[土]美人画の四季④
- ◆ 10月26日[土]浦上コレクション 東洋陶磁の美
- ◆ 11月 9日[土]美人画の四季⑤
- ◆ 11月23日[土・祝]龍一伝説への道
- ◆ 12月14日[土]美人画の四季⑥

※ギャラリートークへのご参加には観覧券が必要です。

臨時的休館やイベントを中止・変更する場合があります。

詳しくは当館ホームページをご覧ください。

URL <https://hum-web.jp/>



公式HP

表紙について

水野年方「今様美人 十一」(部分)、横大判錦絵、明治32年(1899) 「美人画の四季」で展示【⑤10月29日(火)~11月24日(日)】

明治期の女性を一年の各月の行事とともに描いたシリーズの一図です。本シリーズに備わる目録から、十一月の子供の宮詣を題材として考えられます。画面右上に描かれた傘の陰には男性らしき足元が見え、その辺りにハトが群がっています。ところで、母親は娘にどのようなことを話しかけているのでしょうか。想像が膨らむ作品です。

交通アクセス

【新山口駅から】

- 直行バス「スーパーはぎ号」(約60分)で 萩・明倫センター下車、徒歩約5分
- 防長バス(約90分)で 萩バスセンター下車、徒歩約12分

【山口宇部空港から】[萩・石見空港から]

- 萩近鉄タクシー(乗合タクシー) 約70~80分(利用前日までに要予約)

【JR山陰本線】

- JR萩駅からタクシー約7分
- JR東萩駅から萩循環まあるバス(西回り)約20分
- JR玉江駅から徒歩約20分

【自動車】

- 「中国自動車道」美祿東JCT経由、「小郡萩道路」絵堂ICから約20分
- 「山陰自動車道」三見ICから約10分、国道191号沿い



最新情報は公式SNSで

山口県立萩美術館・浦上記念館
 HAGI URAGAMI MUSEUM

〒758-0074 山口県萩市平安古町586-1 TEL 0838-24-2400 FAX 0838-24-2401
 URL <https://hum-web.jp/>

季刊「萩」 令和6年(2024)10月1日 通巻第113号 [発行]山口県立萩美術館・浦上記念館 山口県萩市平安古町586-1